11月13日記

新月の前の闇夜の日に、ニシノブルームーンを買う

今週から、暮れの有馬記念まで7週連続でG1レースが行われる。G1シーズン突入というわけだが、この年になると、競馬に熱中していた若い頃に感じたワクワク感はない。それよりも、このように、庶民のお金を毎週少しずつ巻き上げるシステムをつくった人々に、敬意すら感じる。

日本の競馬システムというのは、一般庶民から広く浅く、そして気づかれずにお金を巻き上げるシステム
としては、本当によくできている。毎週、週末の土日にレースを開催し、負けた人間を1週間かけて癒しつつまたやる気にさせて、ふたたび参加させる。そして、ダービーや天皇賞、有馬記念などというビッグなG1 レースは、みな給料日後の月末に設定されている。

毎週少しずつ巻き上げ、最後にドーンとカモる。とくに有馬記念では、「1年の総決算」などという雰囲気を演出して、さらにカモる。このくり返しは、慣らされると、本当にマヒしてしまい、逆にこのサイクルのなかにいないと不安になってくる。

日本の競馬は、サラリーマンが支えている。だから、サラリーマンの懐具合と、JRAの売り上げは見事に比例
している。

今年、JRAから発表された2008年の年間売上高は対前年比0.3%減の2兆7502億99万400円。これは、1997年の約4兆円をピークに年々減少、11年連続で前年を下回っている。また、今年上半期売上は、１兆2455億4349万
7400円で前年比94.4%だから、通年でも前年を下回るのは確実だ。つまり12年連続ダウンである。

では、サラリーマンの給料のほうはどうだろうか？

国税庁の「民間給与実態調査」（2008年）によると、給与所得者の平均年収は、1997年の467万円から2007年の437万円へ30万円も減少している。その後も減少しているのは間違いないから、今年も含めれば12年連続ダウンで、見事にJRAの売上ダウンと比例する。

さらに、この12年で、サラリーマン（とうか正規社員）の数も減った。非正規労働者の数が増え続け、とうとう、年収200万円以下のワーキングプア層が218万人増え1032万人と、1000万人」を超えてしまった。

そして、いま、今年のサラリーマンのボーナスが史上最低になるという調査が次々と発表されている。たとえば、10月28日、日本経団連が発表した大手企業の今冬のボーナス妥結状況によると、組合員1人当たりの妥結額（加重平均）は前年実績比15.91％減の74万7282円で、冬のボーナスでは調査を開始した1959年以降最大の減少という。しかし、これは大企業の話で、中小となれば、「ボーナスが出るだけマシ」という大不況である。

ちなみに、いまの民主党政権は官僚政治打破で、公務員改革をやっている（とされている）が、国家公務員の平均年収は約662万円、地方公務員の平均年収は約728万円。これに対して、サラリーマンの平均年収は439万円である。

また、今年の6月に新生銀行系のノンバンク「新生フィナンシャル」が行ったサラリーマンの小遣い調査によると、毎月の小遣いの平均額は4万5600円と、ダウン中である。

こんな情勢のなか、G1の7連戦で、サラリーマンの懐からどれだけのお金がJRAに流れるのだろうか？
有馬記念が終わったとき、今年もまた、年末派遣村が出現するのだろうか？

さて、では、ここから　本題の競馬予想に入る。

このような情勢下で、どのように予想すればいいのかは、非

常に難しい。ギャンブルは長くやれば胴元以外は確実に損をするのだから、きれいに楽しく負けなければならない。そのためには、本命買いで負けるのと大穴狙いで負けるのとは、まったく意味が違う。

　誰もが勝った理由を知りたいように、負けた理由も知りたいわけで、納得して負けることこそいちばんの美学だと思う。

　とくに、牝馬のG1であるエリザベス女王杯なら、なおさらだろう。



[redacted]

日	月	火	水	木	金	土
1 14	2 15	3 16 満月	4 17	5 18	6 19	7
8 21	9 22	10 23 下弦	11 24	12 25	13 26	14
15 28	16 29	17 0 新月	18 1	19 2	20 3	21
22 5	23 6	24 7	25 8 上弦	26 9	27 10	28
29 12	30 13					

[redacted]